2017.03.19
桑山　昭

「ラオス・ビエンチャンでの家庭訪問」

贈呈式の後と翌日に、ACDAのスタッフと一緒に12軒の家庭訪問を実施した。

1. Bountha nome（男児）　12 歳脳性麻痺を患っている。
これまでは3輪車のようなものに乗っていた。今回、このような車椅子をもらい嬉しい。学校は楽しい（送迎はオートバイ）。両親は勉強が一番の心配とのこと。本人はレーシング用の車椅子も欲しいと言っていた。テレビで日本のアニメを見ているので、知っている日本語を話してくれた。非常に利発そうな子どもだった。足以外は不自由なところはないので、今後は活発に活動できると思われた。

嬉しそうに片野理事の質問に答える子ども

子どもの自宅（複数の家族と同居か？）

2. Kong nang Song（女児）　12 歳　出生時の障害（双子で1週間遅れて生まれた）を背負った。古い車椅子（使用者が亡くなってもらった）を8年間使っていたが、今回このような車椅子をもらい喜んでいた。学校は近いが行っていない（本人は行きたい）。家でテレビは見る。子どもは双子の姉妹だけ;父の職業は田んぼ、収入は食べる分だけ

子どもを車椅子に乗せ、これまでの車椅子を説明する親

これまで使ってきた車椅子（SINGHAの表示）

近所のおばさんも加わって車椅子談義

自宅の近くに雄大なメコン川が流れる

3. KhamPeng（男）　26歳　出生時に脳性麻痺ととなった。5歳くらいから車椅子を使っていたが、今はない。日中は家の前の小屋に座っている（移動はひざで）。トイレは介助が必要。舌が短く話せないが、車椅子に座ってから盛んに笑顔を見せてくれた。父は子どもの障害がわかってから出て行った。母（48歳）は田んぼの仕事、兄は外での仕事（アルバイト的な日雇い労働の様子）で生計を立てている。月収は50ドル程度。このような収入の家が多い。

（写真上左）　まだ、車椅子が届かず、いつも過ごしている小屋風の建物で車椅子を待っていた。
（写真上右）　車椅子が届いたのでACDAのスタッフと共に息子を車椅子に乗せる母親。

（写真上左）　片野理事に車椅子を押してもらい喜ぶ KhamPeng さん。
（写真上右）　車椅子をもらって喜ぶ親子。母親は実に明るい。（ほとんどの母親が明るい）

4. Top(M) 12 歳(男児)　出生時から足が弱く、歩けるが転びやすい。危険なので車椅子を必要としていた。話すことができず、学校には連れて行ったが、勉強ができなくてもう行っていないと母親が話してくれた。男 3 人の 2 人目で、兄(16 歳)は、この子の面倒を見てくれると言っていた。お寺によく行くので親としては助かっている。父は田んぼ仕事のアルバイトで、その収入で生計を立てている。近くにバイクショップはないので車椅子の簡単な修理も難しいのではないかと心配した。その辺は、ACDAのサポートに期待する。

（写真上左）　車椅子に乗る子どもの具合を確認するACDAの Vomelachith さん
（写真上右）　自宅は結構大きく、貧困というわけではなさそうだった。子どもの母親はあかるく、祖母と曾祖父と暮らしているとのことだった。

5. Parkham（女児） 10 歳　脳性麻痺（？）　右足にパイプが入った状態だった。車椅子は初めてとのこと。父はアルバイトで定職にはついていないようである。姉が一人いる。母は仕事で不在だった。学校は近く（1 km くらい）友達も多いが、今は手術後で 3 か月ほど休んでいる。車椅子を手に入れて、嬉々としていたのが印象的だった。

（写真上左）ACDAスタッフと父親に車椅子を支えてもらい写真撮影。
（写真上右）贈呈式会場で、手に入れた車椅子をすぐに動かしてすいすいと会場内を動き回っていた。

6. Khamhxai（男児） 3 歳　生後 3 か月で高熱により脳性麻痺を発症した。ACDA はこのような状態の子どもの存在に関して病院から情報を得ている。そしてその情報を元に支援を行っている。
　両親は仕事で不在だったが、鍛冶屋をしているおじいさんが 3 人の孫をみていた。おじいさん（まだ若い）は車椅子の仕組みをよくわかっていて一緒に調整した。ここの車椅子がハンドル無かった。（YSC16L002）　できれば、ハンドルが欲しいと言っていた。同行したACDAスタッフの看護師の Khanathaly さんがよく面倒を見ていた。（よく訪問しているらしい）

車椅子に子どもを乗せて様子を確認

鍛冶屋を営む祖父（正面で座っている男性）

7. Tome（男） 18 歳　小1(6 歳)のときに高熱による脳性麻痺を発症した。3 人兄弟の一番上。意思の疎通はできる。ゲームでも遊んでいる。日本を知っていた。父は市役所のアルバイト。（収入は月に 6000 円くらい）車椅子は初めてとのこと。食用の鶏とペットの小鳥を飼っていてやや余裕がある家庭のようだった。

（写真上左）　母親は次の子をお腹に抱えている。車椅子がきて楽になると喜んでいた。
（写真上右）　片野理事の話しかけに反応していた。

8. Khamhmok（男児） 11 歳　脳性麻痺。車椅子は初めてで、これまでは家の中や、外のゴザに座っていた。兄、姉がいる末っ子。父はアルバイト（包丁研ぎ、1 回 3 円）をしている。収入は多くて一日 1000 円で少ないとこぼしていた。倍は欲しいと言っていた。小屋のような家で貧しさが分かる建物だった。土地代は払っているらしい。

（写真上左）　近所の子に車椅子を押してもらう。これから一緒に行動をする練習でやってもらった。
（写真上右）　近所の子どもが興味深そうに車椅子に乗った子どもを見ていた。

（写真上左）　右手が不自由で、左手一本で車椅子を操ろうとしていた。なかなか難しそうだった。
（写真上右）　この村全体が貧困層のようで、周りもトタンを張り合わせただけの家がほとんどだった。

9. Phone Souk（女性）26 歳　小学校 4 年生から障害が出た。消防の宿舎に親戚と一緒に住んでいる。両親は仕事で不在だった。兄一人がいる。初めての車椅子とのこと。本人は周りの話がわかっている様子。

（写真上左）　親戚の女性（既婚:妊娠中）と一緒に住んでいる。両親が仕事で不在なので、面倒を見ている。
（写真上右）　父親が消防署の職員らしいが、民間の会社で給与が低いようだった。消防署の職員が住む社宅（？）は全体が貧しいようである。

（写真左）
　消防車が格納されている建物の奥に署員家族が生活する建物がある。決して裕福な環境ではなかった。
　消防の仕事は、定職といえる形ではないようだった。出動すると報酬がもらえるといった仕組みらしい。

10. Phouth（男児） 1才５か月

中学1年生の兄が障害児の弟の面倒をよく見ている。父はアルバイト、母はミシンで縫い物（洋服の下処理）のアルバイトで家計を支える。

泣く子をあやす母親

弟の面倒をよく見る兄。横には母親の仕事の道具がある

11 Tounee（女児） 12 歳

新築の家に引っ越したばかりで学校の先生たちが客としてきていた。父（50歳）は軍隊勤務。姉も軍隊。母はミシンで縫い物のアルバイトをして家計の足しにしている。新築の家も立派で、今回訪問した家庭の中でもっとも裕福な家庭だった。車椅子は初めてとのこと。学校は遠いが家族がバイクで連れて行っている。友達は多い。

車椅子が無くても少しの移動はできるので屋内では使用していない。車椅子は玄関先のテラスに置かれていた。写真上左の真ん中の少女が車椅子利用者。

写真上左の左側に座る二人が両親。父親はベトナム戦争をアメリカと戦った英雄である。壁にはたくさんの写真が飾られていた。

ラオスでは、休日のお昼は多くの人を招き、テラスなど外で宴会をするのが習慣とのこと。今日は、車椅子をもらった子の学校の先生が招かれて一緒に食事をしていた。食事を勧められて断ってはいけないと言われたので、少しだけ頂いた。ラオス料理は種類が豊富で美味しい。

12. Iasala（男児）12 歳

弟がいる。最近引っ越してきた。父は仕事で不在とのことだった。車椅子（YSC16L053）のサイズが合っていない感じだった。（写真には無いが付いていたテーブルの台が高すぎる）　サイズを測って後で取り替えることを考えているとスタッフの Vomelachith さん。

（写真上左）　ステップの調整も必要な状況だったが、本体そのものを交換することを考えているとのことなので調整は行わなかった。左で男の子を抱っこしているのが母親。

（写真上右）　車椅子で楽になることに感謝する母親。

（写真左）

贈呈式の車椅子合わせでも、子どもの体型にテーブルが合っていなかった。

以上